



のと海洋ふれあいセンターだより

の と かい ちゅう りん  
能 登 の 海 中 林

NEWS LETTER OF NOTO MARINE CENTER No.64, Mar. 2026



ドレッジ採集の様子 (p.2~5 参照)

<目次>

能登海洋生物合同調査（能登ドレッジ）の開催	豊田 賢治	2
ヤドカリ学級で学ぶ内浦海岸の変化	東出 幸真	6
トピックス		7
センター誌抄と観察路だより		8

# 能登海洋生物合同調査(能登ドレッジ)の開催

## はじめに

2024年1月に発生した能登半島地震、ならびに同年9月の能登半島豪雨は、人々の生活に甚大な影響を及ぼしただけでなく、能登半島沿岸の自然環境にも大きな変化をもたらしました。私は2022年10月から2024年3月まで金沢大学環日本海域環境研究センター臨海実験施設に所属し、同僚や学生、そして能登半島の多くの方々の協力を得ながら、沿岸域に生息する動植物の多様性に関する研究を進めてきました。こうしたご縁に加え、震災や豪雨以前に取得していた動植物の生態データを活用することで、これらの大規模な環境攪乱が能登半島沿岸の生物相にどのような影響を与えたのか、また、災害前の状態へと回復するにはどの程度の時間を要するのかを明らかにする調査・研究を現在進めています。一方で、これらの活動を進める中で、「能登半島で生物調査を行いたい、震災や豪雨の影響により、どこで、どのような調査が可能なかわからない」「現在、県外から研究目的で能登半島を訪れてよいのか判断がつかない」といった声を、多くの研究者から耳にするようになりました。そこで、こうした声に応えるとともに、研究活動を通じて能登半島を少しでも盛り上げる一助になればとの思いから、2025年10月に全国の大学・教育機関から学生や研究者を募り、能登半島の深海から浅海に至る生物を幅広く調査するプロジェクトを企画しました。本稿では、この調査プロジェクトの活動内容についてご紹介します。

## 調査の概要

2025年10月6日から10日までの4泊5日の日程で、金沢大学能登臨海実験施設の宿泊棟を拠点として、「能登海洋生物合同調査(通称:能登ドレッジ)」を開催しました。本調査には、知人からの呼びかけやSNSを通じて、全国の大学や教育機関から多彩な専門分野をもつ学生・研究者あわせて32名(学生19名、博士研究員2名、学芸員1名、大学教員など10名)が参加しまし

豊田 賢治 (広島大学統合生命科学研究科・准教授)

た。参加者の関心分野は実にさまざま、カニやエビ、ヤドカリなどの甲殻類、ゴカイの仲間である環形動物、巻き貝やウミウシといった軟体動物、クモヒトデやウニなどの棘皮動物、海産魚類など、比較的よく知られた生きものを対象とする研究者がいる一方で、ウミクワガタやウミナナフシ、ウミグモといった、あまり一般には知られていないものの(え?そんなことない?)、非常に魅力的な生きものを専門とする参加者もいました。また、甲殻類や魚類に寄生する生物に注目して調査を行う研究者や、「とにかく能登の海の生きものを自分の目で見てみたい」という強い思いをもって参加した学生も多く見られました。今回の調査には初対面同士の参加者も多く、初日の夜には顔合わせを兼ねた決起集会を開催しました(図1)。実は、私の不手際により、開催当日まで参加者同士がお互いに「誰が参加するのか」を知らない状態でしたが、その分、現地での出会いは新鮮で、結果的には良いサプライズになっていたのではないかと信じています。



図1 決起集会

## ドレッジ調査

本調査の目玉は、プロジェクト名にも冠した「ドレッジ調査」です。ドレッジとは、海底にワイヤーで吊り下げたカゴ網を引きずり、海底の土砂やそこに生息する生物を物理的にすくい取って回収する調査方法です。今回は金沢大学

能登臨海実験施設の実習船「あおさぎ」を利用し、九十九湾内の浅海域から、九十九湾沖の最大水深400mに至る底生生物の調査を行いました。これまでも同船を用いたドレッジ調査からは、フタバコスモガニやアカホシコブシといった珍しい生物が見つかっています（角田ら 2025, 2026）。そのため、今回の調査でもどのような生物に出会えるのか、参加者の期待は大いに高まりました。ドレッジ調査は天候や海況に大きく左右されますが、プロジェクト期間中には合計14回のドレッジを実施することができ、幸運にも水深400mでの調査も1度行うことができました。ドレッジによって海底から引き上げた泥は、調査ごとに別々の容器に分けて臨海実験施設の浮棧橋まで持ち帰ります（図2）。その後、網目1~2mmの篩にかけて細かな泥を落とし、作業スペースに運んで、参加者全員で手分けしながら生物を分類群ごとに仕分けしました。「え？これも生き物なの？」と驚くような形態のものや、「これが貝の仲間……？」と首をかきげたくなるような不思議な生物が次々と見つかり、作業場は常に賑やかな声が飛び交っていました。今回のドレッジ調査では、現時点でクモヒトデ類が10種（渡部ら 2026）、ゴカイの仲間が60種以上、甲殻類が30種以上などなど予想を大きく超える種数が確認されています。今後、標本の整理と同定を進め、全体で何種類の生物が確認されたのかを順次公表していく予定ですのでお楽しみに！



図2 得られた泥中から生き物を探す参加者

## のと海洋ふれあいセンター周辺における生物調査

今回の参加者の多くは、能登半島を訪れること自体が初めてであり、日本海側でのフィールド調査も初体験という方が少なくありませんでした。そこで、能登半島の沿岸環境や生物調査の魅力を存分に感じてもらうことを目的として、関係各所の協力を得ながら、ドレッジ調査以外にもいくつかの調査機会を設けました。

日本海側の沿岸は、太平洋側と比べて潮間帯があまり発達しないという特徴があります。このような環境に生息する生物を調べるため、希望者を対象にシュノーケリングや手網による浅海域での生物採集を実施しました。のと海洋ふれあいセンター周辺では、近年もムラサキウニの巣穴に共生する生物の調査（山守ら 2026）や、ヤドカリ類に寄生する甲殻類の発見（豊田ら 2025）など、新たな知見が次々と得られています。調査期間中は、毎日4~5名の希望者がそれぞれの関心に応じた生物採集に取り組みました。ある参加者は、近年能登半島で確認され始めた巻貝類ウズイチモンジの生息状況を調査し、本種が同所的に見られるウラウズガイなどの他の巻貝類とは異なる生息環境を好む可能性を見出しました（宮崎ら 2026）。また、フタミズテッポウエビというテッポウエビの仲間がこの調査で石川県から初めて見つかりました（京谷 2026）。10月とはいえ、多くの参加者がウェットスーツ姿で調査に没頭しており、陸上で安全管理に徹していた私の方が寒さを感じるほどでした。このほか、一部の参加者はスキューバ潜水によって岩礁帯や砂泥底、アマモ場といった異なる環境での調査を行いました。また、プロジェクト終盤には、センター周辺の礫浜において、間隙生の魚類や甲殻類、環形動物を対象とした採集も実施しました。参加者はそれぞれに成果を得て、満足そうに標本を研究室へ持ち帰っていました。

## 能登町内の漁港岸壁と磯における夜間調査

私たちの研究室では、年に数回の能登半島調査を行っており、夜間採集からはこれまでも多くの興味深い成果が得られています。例えば、ムラサキウニに共生する2種の甲殻類（ムラサキヤドリエビとムラサキゴカクガニ）の発見は、

その代表的な例です（角田ら 2025）。夜間調査は、昼間とは異なる生物の活動を観察できる点で非常に魅力的であり、非日常的な体験でもあります。今回の合同調査でも夜間調査を希望する参加者は多く、合計3日間にわたって実施しました。姫地区の漁港岸壁では、海藻に付着する無脊椎動物や、夜間に活発に行動するヤドカリ類の採集を行いました。一方、小木地区の磯では、参加者が胴長を着用し、手網を用いて岩礁周辺の生物を丁寧に採集しました。調査期間中、磯には大量のコモンフグの稚魚が集まっており、手網を海水に入れるだけで次々と入ってくるような状況でした。その一方で、イカの幼生や小型のアメフラシなどにも出会うことができ、参加者の関心を大いに引きつけていました。結果として、多くのヤドカリ類、コエビ類、ウミグモ類が確認されました。この夜間調査では、これまで石川県から報告のなかったゴホンアカシマホンヤドカリとクロシマホンヤドカリ、さらに能登半島からの記録が極めて少なかったイソヨコバサミの、計3種のヤドカリ類を新たに確認することができました（豊田ら 2026）。

### 定置網調査（曾々木・輪島港）

私たちは2023年秋頃から、輪島市曾々木で定置網漁を営む第五曾々木丸および第八そそぎ丸の協力を得て、定置網に混獲される未利用魚の調査を進めてきました。これまでに、クロヘリメジロザメの石川県初記録（角田ら 2023）や、コモンサカタザメから見つかった寄生虫の報告（角田ら 2025）、さらには1,600個体を超えるインダイ幼魚の模様パターンを解析した研究成果などを発表してきました（豊田・角田 2025）。今回のプロジェクト期間中も輪島港を訪れ、次々と水揚げされる魚類の見学を行いました。また、船頭のご厚意により、ハマダツやアカエイなど多様な魚種を分けていただく機会にも恵まれました。これらの魚は研究室に持ち帰り、魚類寄生性甲殻類を専門とする参加者によって、口腔内や鰓、体表などが入念に調べられ、多くの寄生物が確認されました。その後、学生らによってお魚たちはお刺身へと変貌を遂げ、能登の海が育んだ魚たちを味わっていました。今回の調査では、ハマダツという魚からダツノヒトガタ

ムシという寄生性のカイアシ類（甲殻類の仲間）や（佐藤ら 2026）、ウミクワガタ類が発見されました（太田 2026）。

### 深層水施設におけるプランクトン調査

能登町にある能登海洋深層水施設「あくあす能登」では、小木沖の海底約300m地点から海洋深層水が汲み上げられています。この際、深層水とともにプランクトンなどの小型生物も地上まで運ばれるため、それらを除去する目的でフィルターが設置されています。私たちは、このフィルター部に溜まる深海性プランクトンの種類や個体数を、震災以前から定期的に調査しており、季節変動や震災前後での変化を明らかにすることを目指しています。プロジェクト期間中にも一度本施設を訪れ、フィルター部に蓄積したプランクトンを採集する機会をいただきました。地上にいながら水深300m付近のプランクトンを観察できるこの調査は非常に貴重であり、現在、得られた試料の分析を進めています。今後、これらのデータから明らかになる深海プランクトンの実態について、改めて紹介できるよう準備を進めています。

### おわりに

これらの調査以外にも、金沢大学能登臨海実験施設の浮棧橋で集魚灯を用いた夜間観察や、能登町の九里川尻川河口域におけるモクズガニやクロベンケイガニなど河川性カニ類の採集を行いました。また、生物採集にとどまらず、臨海実験施設の生物標本室の見学や、のと海洋ふれあいセンターに収蔵されている能登半島の生物記録に関する貴重な文献コレクションの閲覧など、非常に多岐にわたる活動を行うことができました。今後は、参加者が中心となって、本プロジェクト全体で得られた生物情報を精査し、できるだけ早く公開していくことが私たちに課せられた重要な役割です。生物調査は「生きものを採集したら終わり」ではなく、それらの情報を地域の方々や世界中の研究者が利用できる形で発信してこそ、大きな意味を持ちます。本合同調査プロジェクトは、研究者の立場から能登半島の復興に少しでも貢献したいという思いで始まりました。参加者の皆さんには、得られ

た成果を積極的に公表していくことをお願いしています。冒頭でも述べたように、能登半島沿岸の動植物は2024年の震災と豪雨によって甚大な影響を受けました。しかし、生物は私たちが想像する以上に強靱で、したたかな生存戦略を備えています。生物調査を継続的に行うことで、天災による短期的な変化だけでなく、地球温暖化に伴う海水温上昇など、中長期的な環境変化が生物に与える影響も明らかになっていきます。本稿を通じて、読者の皆さまが能登半島の沿岸生物に少しでも関心を持ち、こうした調査活動に参加してくださる方が増えれば、これほど嬉しいことはありません。

### 謝辞

本稿で紹介した能登海洋生物合同調査は、能登里海教育研究所との共催により実施しました。プロジェクト期間を通じて、参加者全員の宿泊環境や作業環境の整備、ならびにドレッジ調査の運営を柔軟に支えてくださった金沢大学能登臨海実験施設の鈴木信雄先生、小木曾正造氏、鷹巣真琳氏、曾良美智子氏に、心より感謝申し上げます。また、本プロジェクトの実施にあたり、金沢大学の浦田 慎先生、のと海洋ふれあいセンターの東出幸真氏および荒川裕亮氏、輪島市役所の角 知子氏には、調査計画や現地調整において多大なご協力をいただきました。さらに、定置網調査では、第五曾々木丸および第八そそぎ丸（船頭：小木幸貴氏）の乗組員の皆様に、漁業活動の合間にもかかわらず多くの便宜を図っていただきました。ここに深く御礼申し上げます。深海プランクトン調査に際しては、能登海洋深層水施設「あくあす能登」の皆様にご協力をいただき、貴重なサンプリングの機会を提供していただきました。本プロジェクトは、公益信託ミキモト海洋生態研究助成基金、タカラ・ハーモニストファンド助成事業、および2025年度金沢大学環日本海域環境研究センター共同研究（採択番号：25033）の助成を受けて実施しました。この場をお借りして、関係各位に厚く御礼申し上げます。

### 引用文献

- 1) 宮崎息吹ら (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 11-16. 能登半島におけるウズイチモンジ *Trochus rota* (軟体動物: 腹足綱) の出現
- 2) 角田啓斗ら (2023) 水生動物. AA2023-22. 石川県からクロヘリメジロザメ (メジロザメ目: メジロザメ科) の初記録
- 3) 角田啓斗ら (2025) のと海洋ふれあいセンター研究報告 30: 1-6. アカホシコブシの京都府と島根県からの初記録及び石川県からの追加記録
- 4) 角田啓斗ら (2025) のと海洋ふれあいセンター研究報告 30: 7-12. 石川県からムラサキウニの共生性甲殻類2種の初記録
- 5) 角田啓斗ら (2025) のと海洋ふれあいセンター研究報告 30: 17-22. 能登半島沖におけるコモンサカタザメから得られた寄生虫2種の記録
- 6) 角田啓斗ら (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 23-25. 本州日本海側におけるフタバコスモガニ *Cosmonotus mclaughlinae* の初記録
- 7) 豊田賢治ら (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 55-61. 能登半島のヤドカリ類の新産地記録
- 8) 豊田賢治ら (2025) のと海洋ふれあいセンター研究報告 30: 53-60. ヤドカリ寄生性甲殻類 (等脚目: エビヤドリムシ科) の石川県と広島県からの初記録
- 9) 豊田賢治・角田啓斗 (2025) のと海洋ふれあいセンター研究報告 30: 31-36. イシダイ幼魚の横帯模様の変異パターン
- 10) 山守瑠奈ら (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 35-42. 能登半島潮下帯に見られるムラサキウニ巣穴の共生生物
- 11) 渡部泰斗ら (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 113-123. 九十九湾周辺のドレッジ調査で得られたクモヒトデ類
- 12) 佐藤宏樹ら (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 107-112. 石川県輪島市沖産のハマダツから得られたダツノヒトガタムシ (カイアシ綱: 管口目: ヒトガタムシ科)
- 13) 京谷蒼馬 (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 5-9. フタミゾテッポウエビの石川県における初記録 (十脚目: テッポウエビ科)
- 14) 太田悠造 (2026) のと海洋ふれあいセンター研究報告 31: 69-76. 能登半島沿岸で得られた等脚目ウミクワガタ科4種の記録: 2種の日本海初記録

# ヤドカリ学級で学ぶ内浦海岸の変化

東出 幸真

2025年11月9日と12月6日に、能登半島地震後の海岸環境の変化や、地域の海の文化を次世代へ伝えることを目的とした体験型プログラムを実施しました。11月9日は「イカ料理を学ぼう」、12月6日は「イワノリをみつけよう」です。どちらも震災をきっかけに改めて注目されている“海と人との関わり”をテーマにした取り組みです。

12月6日に実施したヤドカリ学級「イワノリをみつけよう」では、冬の岩礁海岸に生育する紅藻類、イワノリを探しながら、現在の海岸環境を観察しました。内浦側の海岸では、地震による地形変化に加え、近年の気候変動に伴う海面上昇などの影響も重なり、相対的に水位が高くなっている場所が見られます。参加者は、こうした地形変化が生物の分布や人の利用の仕方に影響を与えていることを、実際に磯を歩きながら学びました。イワノリは、潮間帯上部の限られた環境条件で生育しますが、現在では観察路の飛び石にも生育が見られるなど、環境の変化を身近に感じられる機会となりました。



磯の観察路でイワノリを探す参加者

一方、11月9日に行った「イカ料理を学ぼう」では、能登里山里海マイスターの瀬川しのぶさんの考案されたレシピをもとに、能登里海教育研究所の能丸恵理子さんの指導で、能登の代表的な水産資源であるスルメイカを題材に、調理体験を通じて食文化を学びました。近年、スルメイカの不漁が指摘されるなか、船上で急速冷凍される「船凍いか」など、流通や加工の工夫についても紹介いたしました。料理を作るだけでなく、漁業の現



船凍いか（スルメイカ）を使った料理



## ホイル焼きカレー風味 レシピ

【材料】 イカ(胴)…1尾/コーン…20g

酒…小さじ1 しょうゆ…小さじ1/2

A いしる…小さじ1/2 カレー粉…小さじ1/4

バター…5g パセリ…少々

### 【作り方】

- ①イカ(胴)は皮面に格子状に切り込みを入れ、食べやすい大きさに切ります。
- ②アルミホイルに①とコーン、混ぜあわせたAを入れ、200度のオーブンで10分焼きます。

状や、なぜ今この文化を知り、継承していく必要があるのかを考える時間となりました。

二つのプログラムは、対象や内容は異なるものの、地震後の環境変化を前向きに捉え、自然と文化の双方を次世代へ伝えていくという共通の視点を持っています。変わりゆく海を正しく知り、そこに根付いてきた暮らしや知恵を学ぶことは、復興後の地域を支える大切な基盤となります。今後ものと海洋ふれあいセンターでは、こうした学びの場を通じて、海とともに生きる能登の姿を発信していきたいと考えています。

(普及課長)

トピックス

## 日本海ニホンイトヨ探索プロジェクト

荒川 裕亮

震災前の2023年3月に、町野川の河口においてニホンイトヨが採集され、石川県内では16年ぶりの記録となりました。本種はトゲウオの仲間、川で産卵し、主に海で成長するという遡河回遊性の生活史を持ちます。分布域は、日本海沿岸や太平洋沿岸の茨城県以北です。近年、本種の個体数は激減しており、石川県と新潟県で「絶滅危惧Ⅰ類」、富山県で「絶滅+野生絶滅」に選定されているように、分布情報が限られるため、現状を把握することも難しい状況にあります。

そこで昨年、日本海沿岸におけるニホンイトヨの保全に向けて、石川県・富山県・新潟県の3県の水族館などの施設が連携して、「日本海ニホンイトヨ探索プロジェクト」を発足しました。のと海洋ふれあいセンターも参加しており、昨年7月から、当センターではニホンイトヨの生体展示を行っています。この展示個体は、プロジェクト代表の渡辺晃史氏（新潟大学大学院自



然科学研究科) が北海道石狩川水系の個体を繁殖させて育てた個体の一部を提供していただきました。展示は富山県の魚津水族館でも同時に行われており、広域的な普及活動を実施しています。今後は、海から川へ遡上する春に、3県で一斉調査を予定しており、絶滅に瀕するニホンイトヨの生息状況を調べながら、保全に向けた連携を進めていきたいと考えております。

(普及課 主任技師)

## ヒョウモンダコが見つかりました

東出 幸真

2025年7月13日に開催したスノーケリング指導者研修会において、参加者が小型のタコを発見しました。スノーケリング指導を行うボランティア組織の小木曾会長により、ヒョウモンダコと同定されました。

ヒョウモンダコは強い毒（テトロドトキシン）をもつことで知られるタコの仲間、咬まれると命に関わる危険があります。これまで、のと海洋ふれあいセンター周辺では確認例がなく、今回、浅い場所で見つかったことは重要な情報といえます。

ヒョウモンダコは手のひらサイズの大きさで、普段は岩や海藻に紛れて目立ちませんが、興奮すると青い斑紋が現れます。ただ、ぱっと見て小型のマダコとヒョウモンダコを見分けるのは難しいと思われます。

磯観察やスノーケリングを行う際に見つけた

としても、決して触れたり捕まえたりしないことが大切です。

(普及課 課長)

## 参考文献

山手ら (2022) 日本国内におけるヒョウモンダコ *Hapalochlaena cf. fasciata* の分布, 体サイズ, 成熟パターン. 日本水産学会誌



ヒョウモンダコ (スケールバーは5cm)

セ ン タ ー 誌 抄

2025 (令和7) 年後期 (7-12月)

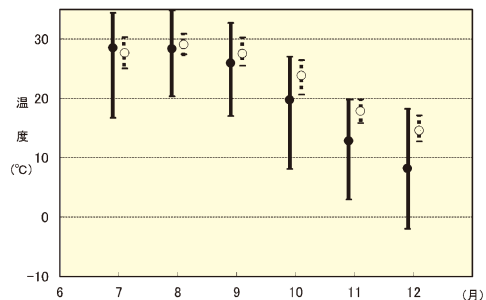
- 7/19 体験スノーケリング (~8/3) 参加者計21名
- 8/3 いしかわ自然学校インストラクタースクール 参加者17名  
パワー磯観察
- 8/4 砺波高校臨海実習 生徒26名
- 9/3 鶴川小学校3・4年生 生徒15名
- 9/12 小木小学校6年生 生徒9名 地層見学 (磯の観察路3か所)
- 9/14 ヤドカリ学級「磯でウミウシをみつけよう」 荒天中止
- 9/17 長浜バイオ大学生物多様性実習 17名 パワー磯観察
- 9/21 「能登の里山里海のいま」を学ぶ 自然観察バスツアー (共催:石川県立大学緑地環境学研究室、後援:石川県) 於輪島市門前町に荒川主任技師、東出普及課長派遣
- 9/25 松波小学校5・6年生 生徒24名 引率4名
- 9/26 小木小学校1年生 生徒9名 引率2名 磯採集
- 9/28 『宇宙の海をつくろう』絵画教室 46名 指導者4名
- 10/2 小木小学校2年生、海洋教育で利用
- 10/3 宇出津小3年生親子行事
- 10/5 神野公民館行事川の生物調査 荒川裕亮主任技師派遣
- 10/10 里山里海マスター受講生3名来訪 聞き取り調査に協力 (荒川・東出)  
見附島調査の現地説明会へ東出幸真普及課長派遣  
宇出津小学校2年生 生徒21名 引率3名 磯観察
- 10/11 ヤドカリ学級『魚釣りにチャレンジ』 荒天中止
- 10/14 七尾高校理数科 地学実習 39名利用
- 10/16 能登GIAHS生物多様性に関するワークショップに荒川主任技師、東出普及課長出席

- 10/17 蛸島小1~4年 生徒17名 引率5名
- 松波小1~2年 生徒14名 引率4名 館内見学
- 10/18 のしろ児童館 児童12名 引率6名 磯観察
- 10/21 松波こども園 児童29名 引率6名 館内見学
- 10/22 輪島市立6小学校 生徒61名 引率6名 館内見学・磯観察
- 10/23 松波小学校1~2年 生徒14名 引率2名 磯観察
- 10/24 輪島市立門前東小 西小 生徒26名 引率6名
- 10/28 応用生態工学会金沢研修会『能登の復興とグリーンシリエンス』にて荒川主任技師講演
- 10/29 柳田小学校6年 生徒12名 引率2名 貝殻マグネット 土鍋製塩を体験
- 11/1 能登里山里海SDGsマスター2025 20名 いしかわの里山里海展2025にタッチプール出展 (~11/2)
- ヤドカリ学級『イカ料理を学ぼう』19名参加
- 11/11 柳田小学校4年 町野川採集観察に荒川主任技師派遣
- 12/6 ヤドカリ学級『イワナをみつけよう』11名参加  
能登里山里海学会2025 ポスター発表 東出普及課長参加
- 12/11 柳田中学校3年 生徒17名 引率3名 磯観察
- 12/12 柳田小学校4年生授業のため荒川主任技師派遣
- 12/14 第11回水族館シンポジウムが千葉県で開催され、東出普及課長を派遣
- 12/19 科博巡回展『博物館が支える生物多様性の保全』を(一社)全国科学博物館振興財団の協力を受け実施 ~1/31

観 察 路 だ よ り

2025年の夏から秋にかけて、金沢地方気象台の発表でも北陸地方で気温が平年より高い状態が続いたことが報告されています。当センターで毎朝記録している気象観測データからも、7月から12月にかけて気温の高い状態が続き、海水温も例年より高めに推移しました。その影響もあり、スノーケリング事業では例年より多くのオヤビッチャが観察されるなど、磯の生きものの様子にも変化が見られました。近年は、気候変動の影響と考えられる海水温の上昇や、生物の分布の変化が各地で報告されていますが、身近な海でも同様の傾向が感じられるようになっていきます。能登の海は四季の変化がはっきりしていることが特徴ですが、その季節の移ろいの中で海の環境も少しずつ姿を変えているようです。当センターでは今後も気温や水温の観測を続けながら、身近な海の変化を記録し、皆さまにお伝えしていきたいと考えています。

(普及課長 東出幸真)



2025年7月から12月の気温と水温の月変化

気温：午前9時に観測した月別平均値 (●)  
 実線は月別の最高・最低気温の範囲を示す  
 水温：午前9時に観測した月別平均値 (○)  
 破線は月別の最高・最低水温の範囲を示す

のと海洋ふれあいセンターだより「能登の海中林」  
 通巻第64号 令和8年3月31日発行  
 編集発行 **のと海洋ふれあいセンター**  
 住所 石川県鳳珠郡能登町字越坂 3-47 (〒927-0552)  
 TEL 0768(74)1919 (代)  
 FAX 0768(74)1920  
 URL: <http://notomarine.jp/>  
 E-mail: [nmci@notomarine.jp](mailto:nmci@notomarine.jp)

のと海洋ふれあいセンター



設置者：石川県(生活環境部自然環境課)；管理運営：一般財団法人 石川県民ふれあい公社  
 入場料：個人は高校生以上210円、団体(20名以上)170円、中学生以下は無料  
 開館時間：午前9時~午後5時(但し、入館は午後4時30分まで)  
 休館日：毎週月曜日(国民の祝日、繁忙期を除く)と年末年始(12月29日~1月3日)